

情 報

- ・障がい者の方が困っていたら思い切って声をかけた
い。
- ・ボランティアは自分も楽しく取り組むことが大事だと
教わった。
- ・障がい者の方も積極的に外に出られるような環境作り
が必要と思う。
- ・人との接し方の大切さと難しさを体感した。
- ・挨拶がその場の雰囲気を変える体験をした。
- ・少しでも人の役に立つことを喜びとして活かしてい
きたい。
- ・AEDの講習を受けたことにより、操作できる自信に
繋がった。

4. まとめ

ボランティアを選択した学生は間違いなく人間的に成長し、人と人との繋がりを豊かに形成し、より地域社会に適応できる素質を身につけたことと思われた。遊びたい盛りの若者が、貴重な休日を利用して参加したボランティア活動で、得た知識や体験は知らず知らず身につけていて、必ずやどこかで生かされるであろう。ボランティアとの出会いによって自然体で楽しく行動が起こせるように、自分が変われば、まわりの見る目も変わる。明日はわからないが、学生諸君には「今」を大切に活躍してほしいと思う。

野村研究室プレゼンテーション抄録

平成15年4月4日 日本学1号館3階の一角にある研究室から発信した「野村研究室プレゼンテーション」の目的は教員の臨床研究をより身近なものとするのであった。参加した教員の研究活動は年々充実し、明倫短期大学学会をはじめとして、日本歯科技工学会、各専門学会で研究成果を報告し、論文を投稿するまでに至った。最近では、専攻科生体技工専攻生や研究生の臨床研究ゼミの発表の場としての役割もあり、多くの教員や若き歯科技工士の活動がその機能を充実させている。さらに、新潟大学の研究者や本学に関連の深い企業の参画により、フィールドが益々広がってきた。本稿では平成19年度内に開催されたプレゼンテーションの抄録を紹介する。さらに、平成15年4月から平成19年11月までの約5年間で発表総数が53テーマ、参加延べ人数が550名を超えたことを踏まえて、発表者とテーマおよび参加者の内訳を表にまとめた。これが教員、専攻生、学科生、専攻科修了生、学外の歯科技工士や研究者などの多くの参加者により支援された活動記録と考えている。

歯科技工士学科 野村章子、丸山 満

第40回：平成19年5月24日

部分床義歯を製作して学んだこと

歯科技工士学科専攻科 生体技工専攻8回生

山崎 七恵

患者は85歳女性で、屈曲鉤を用いた義歯の不適合により床内面に食渣が入り込む、口蓋隆起に床後縁が当たり痛むと訴えていた。そこで、義歯の適合性すなわち維持と安定を考慮した義歯設計に際して、維持・支持・把持機能に優れ、変形しない鑄造鉤を採用した。さらに、粘膜支持域の拡大を目的として、上顎義歯は患者が痛みを訴えていた口蓋隆起を十分に避け、最後臼歯の遠心まで床後縁を延長し、下顎義歯はレトロモラーパットを覆う形態とした。また、維持装置と床を移行的にすることにより舌感と清掃性の向上を図った。

本症例を通して、維持装置の選択と粘膜支持域の拡大が義歯の維持安定に関与する技工理論を理解することができた。